

Title	<書評> Anthony D. Smith, Nationalism and Modernism, Routledge, London, 1998
Author(s)	谷澤, 玲
Citation	年報人間科学. 26 P. 121-P. 125
Issue Date	2005-03-31
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25888">https://doi.org/10.18910/25888</a>
DOI	10.18910/25888
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

Anthony D. Smith

*Nationalism and Modernism, Routledge, London, 1998*

谷澤 玲

ネーションとナショナリズムは近代に特有の現象か否か。これは著者アンソニー・D・スミス<sup>1)</sup>のみならず、ナショナリズムを研究する全ての者にとって避けては通ることの出来ない、最も根本的な問題である。そこに横たわるのは、ネーションとナショナリズムを18世紀以降になって初めて想像され創造された作為の産物と見なすか、あるいはそれらを近代以前にも存在した人間事象一般に見られる恒久的かつ普遍的な現象と見なすかという問題であり、前者は近代主義(modernism)、後者は原初主義(primitivism)あるいは永続主義(perennialism)<sup>2)</sup>と普通呼ばれる。本書は、これら二つの異なった主義主張が互いに交錯する様々な論争の最前線に立つ著者による、ナショナリズム論の概説書である。彼はまるで「理論的議論の只中に立ったパルチザン」<sup>3)</sup>のように、非常に広大かつ入り組んだナショナリズム論の森へと分け入り、種々のアプローチとパラダイムを自らの立場に沿って腑分けしていく。その意味で、まさしく本書は、ナショナリズム研究を専攻する者にとってはある種の教科書であり、また收拾がつかないほどに混乱し錯綜した分野において自らを方向付けるための得難い一つの地図である。

本書は大きく二つの部分に分けて構成されている。まず前半において、アーネスト・ゲルナー、エリック・ホブズボームあるいはベネディクト・アンダーソンらによって代表される近代主義者たちの見解をそれぞれ細微に至って検討した上で、それらに次々と批判を加えていく。批判の対象は、60年代後半から70年代前半にかけて生み出された近代主義の萌芽とも呼ぶべき古典的近代主義(1章)に

始まり、続いて、その批判的継承物として80年代後半から90年代にかけて産み出された様々な近代主義的アプローチへと移る。ネーションとナショナリズムにまつわる諸現象を唯一つ産業化に起因するものとするゲルナーの社会文化的近代主義(2章)、合理的選択理論に基づく社会経済的な近代主義(3章)、アンソニー・ギデンズ、マイケル・マンらによるナショナリズムを近代国家と絡めて分析するより政治的な近代主義(4章)、ネーションとナショナリズムを近代における世俗的宗教であるとするイデオロギー的近代主義(5章)、そして近代主義者の旗頭たるホブズボームとアンダーソンに見られるマルクス主義的近代主義(6章)。これら近代主義的なパラダイムに基づく現象の説明を網羅的に概観し、その本研究分野における功績を認めた上で、それらの限界を批判的に示すという作業が行なわれるのである。さらに後半において、著者スミスは、以上の近代主義的アプローチの欠点を補完すべく、あるいはその批判的射程を乗り越えるべく、近代主義のオルタナティブを模索する道へと進んでいく。ここでは、クリフォード・ギアーツやウォーカー・コナーに代表される原初主義および元統主義(7章)、神話、記憶、シンボル、伝統といった文化的要素がネーションの境界設定に果たす役割を最重要視するエスノ・シンボリズム(8章)、そして近代の終焉と共に、ネーションとナショナリズムの時代の終わりを高らかに宣言するポスト・モダニズム(9章)、へと批判の矛先は向けられる。

著者自身が本書の冒頭で認めているように、これらの腑分けは決

して価値自由的なスタンスに立って行なわれたものではない。あくまでもスミス自身の立場に基づいたナショナリズム論の批判的分類である。よって、まずは彼自身のネーションとナショナリズムに対するパースペクティブを明らかにしておくことが肝要であろう。スミスは本書において自らをエスノ・シンボリストとして位置づけているが、彼自身の立場はよく言われるように近代主義と原初主義の「折衷型」である。つまり、ネーションとナショナリズムは確かに近代になって初めて特別な意味を持つに至ったが、それは何も近代以前どこにも見当たらなかったというような類の現象ではない。前近代においても、地縁や血縁、言語、宗教さらには慣習等に基づくネーションという共同体は存在していたのであり、民族感情とでも呼ぶべき、ナショナリズムに極めて類似した共同体への愛着を持つことも格段珍しいことでは無かった。ネーションとナショナリズムは決して無から生まれたわけではない。それらは近代以前に存在していた、スミスが特に近代的なネーションと区別してエトニ(cethnie)<sup>3)</sup>と呼ぶ共同体とそれに対する愛着を基盤にして産み出された、という訳である。

もう少し、彼の主張を詳しく見ておこう。それは彼の主著である *The Ethnic Origins of Nations*<sup>4)</sup> によく表れている。スミスはまず、前近代におけるネーションたるエトニを二つに類型化する。一方は、その主な成員を都市の上層部を占める富裕階層に求める、貴族的な性格を持った広範囲に渡って漠然と広がる水平的エトニである。他方、垂直的エトニの主たる成員は都市の商人や職人などの中間階層

であり、その性格は民衆的、かつそれが個々の成員に対して持つ集団凝集力は水平的エトニが持つ緩やかなそれを遙かに上回る。そして、これら水平的エトニと垂直的エトニが近代における三つの革命、即ち市場資本主義、官僚国家、大衆教育の出現という契機を経てそれぞれ独自のネーションへと転換されていく。つまり、前者の水平的エトニは、一部のエリートによるトップ・ダウン的な文化の普及を促し、西欧における市民権や法に基づく領域的・政治的な共同体、市民的ネーションへと変化する。その一方で、後者の垂直的エトニは、中東欧・東欧・極東・アフリカ等の前植民地において、自らの文化の再発見・再解釈を通じたボトム・アップ的な民衆文化の浸透をもたらし、それは血縁や神話、歴史などに基いて人々を動員する民族的ネーションとなる、というのがスミスの議論の骨子である。そして彼の本書における批判の方法論は、近代主義者に対しては民族的ネーションの存在を、原初主義者に対しては市民的ネーションの存在を強調し批判するというものであり、まさしく「折衷型」の名に相応しいものであろう。

ともかく、このようなスミスの主張を踏まえた上で、彼が近代主義者に加えた批判を多少詳しく見てみることにする。例えば、ネーションとナショナリズムの出現を、産業化とそれに伴う知識階級の産出の必要性から説明するゲルナーに対しては、「ナショナリストたちの運動が持つ燃えるような情熱と激しい自己犠牲の精神は、族外社会化(exo-socialization)、国民的大衆教育システムおよび高文化(high culture)との結び付きといった言葉で説明することは出

来ない。むしろ、これら全てはナショナリズムとその国民的再生産計画の産物なのである」<sup>(5)</sup>と述べ、ナショナリズムが知識階層の出現を促したのであって決してその逆ではないことを示すことによつて、近代の産業化に先立つナショナリズムの存在を強調する。また、近代国民国家の要請とそれに貢献する知識人の役割を重視するより政治的なアプローチに対しては、「ナショナリスト的知識人は、彼らが基本的な大衆の感情、認識そして態度をはっきりと述べ組織化するのを手助けする限りにおいて、重要であるに過ぎない。これら大衆の感情、認識そして態度は近代の必要性からと同様、知識人たちがそこからネーションに関するイデオロギーを引き出す、既存のシンボル、記憶、神話、価値および伝統からも多くのものを得ているのである」<sup>(6)</sup>と言つ。いずれにせよ、これらの批判は前近代的ネーションの存在とそれが持つ文化的役割の重要性を前提になされている。

アンダーソンに対する指摘も引用してみよう。それは、出版資本主義の興隆を軸にネーションとナショナリズムをそれに起因する現象として理解する『想像の共同体』に対して次のように反論する。「人々を行動へと駆り立てるネーションの描写は、活字的というよりもむしろ口述的、音声的、映像的であり、それはシンボル、歌、映像、口承、儀礼の問題」<sup>(7)</sup>なのであり、「口頭的なネットワークが、ネーションを描写しナショナリズムを広めるエリートの活動に対して決定的な役割を果たす一方、音楽や芸術からラジオ、テレビにいたる他の文化的なメディアは、人々の大多数を刺激し動員し、

常に彼らに分かる「言葉」や文化で彼らに話しかけ、そして彼らと共鳴する神話、シンボル、記憶および伝統を持つメッセージを伝える」<sup>(9)</sup>と。つまり、これは、活字にその中心を置くテキスト分析を批判し、エリートに対して、文字を解することの少ない民衆の役割の重要性を対置するものである。

私は、スミスが以上のような主張に従って近代主義を批判する際に、その指標として用いられている三つの基本的な批判尺度があると考え。一つめは、上記の引用からも窺える通り、エリート／民衆という対立点である。それは、しばしばエリートによる上からのネーションの創造を喧伝する近代主義に対して、近代以前から存在する民衆文化の持つ潜在的な力を強調する。どのような構築・製作であろうとも、もともと民衆の中にそれに呼応する何かがなければ無力であり、「それらの試みは自身を、妥当な既存の社会的・文化的ネットワークに結びつける必要がある」<sup>(10)</sup>という訳である。二つめは、ネーションとナショナリズムという現象が近代において断絶していると捉えるか、あるいはそれらを一つの連続のもとに捉えるかという点にある。もちろん、彼が近代以降に限定されない大局的な歴史観に立って、それらの現象の通時的変化を辿っていることは言うまでもない。三つめは、大雑把に言って、経済・政治システムと文化システムの対立である。スミスは、ネーションとナショナリズムの問題を経済的・政治的な理由に還元して説明あるいは理解することに非常に懐疑的である。なぜならば、そのような還元主義的な認識方法は、文化的な諸要素の総体としてのイデオロギー

が民衆に対して持つ強い動員力を全く無視しており、ときに伴われる経済的・政治的利害を超えた熱狂的なまでの自己犠牲を説明することは決して無いからである。

しかし、このような三つの尺度に沿って近代主義を厳しく批判することも、彼が近代主義と原初主義の「折衷型」であるという謗りから免れることを意味しない。むしろこのようなスタンスこそが「折衷型」とされてきたのである。ならば、スミスの今回の骨折れる試みは全くの徒労に終わることになるのだろうか。そうではないだろう。そのように言う理由の一つは、彼の提出したエトニという概念にある。彼はその概念によって、近代と前近代に明確な一本のラインを引いたのであり、かつて曖昧に使われていたネーションという言葉の持つ意味を近代以降に限定し、複数の使用者に耐えうるしかりとした定義のもとに置き直した。さらにもう一つの理由は、膨大なナショナリズム論を整理・分類し、一枚の体系的な地図を書き上げるといふ彼の試みが、本研究分野で行なわれた殆んど初めてのものであるということにある。スミスは、私たちに議論の土台となる共通の理論的地平を提供した。われわれは、今ようやく話し合えるのテーブルについたばかりである。

#### 注

- (1) 現在、ロンドン大学政治経済学部、ヨーロッパ研究所、「エスニシティとナショナリズム研究部門」の主任研究員。主な著作に *Nationalism in the Twentieth Century*, Martin Robertson, Oxford, 1979 *The Ethnic Origins of Nations*, Basil Blackwell, Oxford, 1986

(1) 『ネイションとエスニティー—歴史社会学的考察』 巢山靖司他訳、名古屋大学出版会、一九九九年)、『Nationalism: Theory, Ideology, History, Polity, Cambridge, 2001』 なつがほ。

(2) 原初主義と永続主義は厳密に違って全くの別物である。前者が、ネイションとナショナリズムを人間存在にとって生物学的あるいは本質的に備わった「所与」の普遍的現象と見なすのに対し、後者はそれらをあくまで歴史のかつ社会的な変容を伴う再発的な現象として扱う。だが、本稿では無用の混乱を避けるため、両者はっきりとした区別は行わない。

(c) Anthony D. Smith, *Nationalism and Modernism*, Routledge, London, 1998, p.vii

(4) ネーションとエトニに共通の特徴は、①名前、②共通の起源に関する神話、③共有された歴史的記憶、を持つことである。一方、ネイションにあってエトニにない特徴は、①明確な境界を持つ領土あるいは「ホームランド」、②公的な文化、③経済的統一性、④合法的権利、⑤全成員に対する責任、である。このような定義上の区別を施すことによって、スマイスはネイションとエトニの歴史的つながりを示しながらも、その質的差異を強調する。

(5) Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations*, Basil Blackwell, Oxford, 1986 (『ネイションとエスニティー—歴史社会学的考察』 巢山靖司他訳、名古屋大学出版会、一九九九年)

(9) Anthony D. Smith, *Nationalism and Modernism*, Routledge, London, 1998, p.40

(7) *Ibid.*, p.116

(8) *Ibid.*, p.139

(9) *Ibid.*, p.139

(10) *Ibid.*, p.130